

日本最南端の半導体ベンダーで働く

東京から離れることおよそ1500km。多くの観光客が訪れる沖縄県に、日本最南端のファブレス半導体ベンダー、マグナデザインネットがある。ワンセグ受信モジュールや、直交周波数分割多重(OFDM)信号復調用LSIの開発を手掛ける。今回登場する安里博一氏は、同社で回路設計を担当するエンジニアである。2007年9月にサンプル出荷を開始したダイバーシティ対応OFDM復調用LSIのハードウェア開発グループのまとめ役を任された。

同氏は、琉球大学工学部を卒業後、EDAツールの手先ベンダーで3年間技術サポート職として働いた。その後、マグナデザインネットに転職したという経歴を持つ。日本最大の都市である東京と、かたや地方都市である沖縄の両方で働いた。同氏は、「東京だから、沖縄だから、というこだわりはあまりなかった」と説明する。確かに沖縄で働くには、デメリットやメリットがそれぞれある。顧客と打ち合わせするために、長時間移動する手間が生じる。一方、きれいな海が身近にあったり、物価が安価だったりというメリットがある。「働く場所の違いはあまり重要なことではない。やりたいことができる。それが私にとって重要なことだった」(同氏)と語ってくれた。

(聞き手=前川慎光)

EETJ 仕事をする上で心掛けていることは何か。

安里氏 会社で働いているときと、自宅に戻ったときの「オンとオフ」をきっちり分けるということだろうか。「オフのときに仕事のことを考えないようにする」というよりは「考えない」。心掛けているというよりは、自然にそうになってしまうと言っ



た方が正確かもしれない。会社を出たら仕事のことを考えないでメリハリをつけた方が、仕事はかどるし、休暇も充実したものになるのではないだろうか。休日には、海を眺めながらバイクでのツーリングや、ゴルフを楽しんでいる。

このほか仕事をする上では、「瞬発力」を大事にしている。規模が大きい会社では、何か仕事をするときに上司の許可をもらう手続きが煩雑かもしれない。しかし、当社は規模が小さいので、「こうしよう」と考えたことをすぐに実行できる環境だ。例えば、技術仕様の変更や問い合わせ、スケジュールの変更など、顧客から指摘されたことに対して可能な限り早く回答するようにしている。

さらに、柔軟性を持つことも心掛けている。例えば、技術仕様やスケジュールなど、一度決めた内容を変更するときに、決めたのになぜ変えてしまうのかと言うよりも、今は事情が変わったので変えた方がいいのだと考えるようにしている。

EETJ 技術者として誇れる点はどこか。

安里氏 サッカーでいうと司令塔役の「ミッドフィールダ」として働いていることだろうか。回路設計に携わっているが、顧客との打ち合わせにも参加する。顧客の意図をうまく汲み取って、それを実際

の回路設計に反映させることができると考えている。

私自身いろいろな業務に関わっていたという性格である。もちろん、OFDM技術については何でも知っているという「プロフェッショナル」な技術者はチームに必要だ。ただし私は、プロフェッショナルの回路設計者というよりは、顧客との打ち合わせや営業、マーケティングとさまざまな業務に取り組める技術者を目指したい。将来的には、1つのプロジェクトを取りまとめる立場になりたいと思っている。

EETJ 課題や悩みを教えてください。

安里氏 会話力を高めることが課題だ。例えば顧客と電話で会話するとき、自分自身では、「このように伝えたい、このような流れで話をまとめたい」と頭で考えていても、それをスムーズに伝えることがなかなか難しい。じれったいし、時間ももったいないと感じる。

EETJ もし社長に就いたら何をするか。

安里氏 エレクトロニクス業界とは関係ないが、「カジノ」を作りたい。日本では誰も取り組んでいないことだ。一度、ラスベガスに行ったのだが、街全体がエンターテインメントに特化していて驚いた。

仕事でももちろん、誰もやっていない製品開発に取り組んでいきたい。当社は、「OFDMテクノロジー・リーダー」を標榜している。OFDM技術と言えば、「マグナ」と代名詞のように評される存在を目指したい。

安里 博一 (あさと ひろかず) 氏

1999年3月に琉球大学工学部の電気電子工学科を卒業し、同年4月に大手EDAツールベンダーに入社した。その後、2002年5月にマグナデザインネットに転職した。現在、OFDM復調用LSIの回路設計に従事している。